



悲観論より楽観論

浅野 純次

(経済倶楽部理事長)

▼アベノミクスで夜も日も明けぬほどの昨今ですが、本家レーガノミクスは Reagan に mics をつけようとして間に○が入って調子を整えたのでした。Abe と mics に○と○を入れる必然性はありません。それはともかく首相本人がアベノミクスを口にするのはほとんどないように見えてこれはこれで結構なことです。

▼第一次安倍政権のときもアベノミクスは唱えられました。言い出したのは当時、自民党幹事長だった中川秀直氏だったと記憶しますが、ほとんど話題になりませんでした。今回は、流鏑馬の一本目の鏑矢が三つ

の的の第一をぶち抜いたところが劇的な展開を見せたおかげで、「三本の矢」というどうということもないキャッチフレーズに世間は盛り上がりました。そもそも日本人は三つが好きなのです。二本や四本の矢ではきつとだめだったでしょう。

▼ご先祖レーガノミクスですが、大統領就任の1981年にはアメリカはスタグフレーションに苦吟しており、レーガン大統領はすぐ減税、財政支出削減(特に福祉予算)、通貨供給量抑制を進めました。結果は強いドル、株価上昇、景気回復を実現した反面、財政と貿易の双子の赤字をひどくさせたのですから功罪半ばというよりも後のリーマンショックの種をまいた責任は大きいでしょう。政策上の近似性はありません。

▼アベノミクスに対する在京六紙の姿勢を見ると朝日読売、日経、産経の○ないし◎に対し、批判姿勢で△の毎日、×同然の東京とに分かれます。原発再稼働絶対反対でもある東京は「ムードに走って危ういアベノ

ミクス」とか「まだ具体的には何も生まれていないのに効果がもう出ているのかのように書きまくる」と他紙批判まで展開しています。メディアが多様な論調を持つことは好ましいことなので、毎日と東京が何を書くか、毎朝、楽しみにしていますけれども。

▼私人はリフレ政策を追求する日銀シフトを敷いたことは極めて正しかったと思っていますが、第二の矢の財政ではいいかげんな大盤振る舞いが始まっていることに大きな危惧の念を持ちます。特に絶好のチャンスと動き始めた霞ヶ関をしっかり監視し手綱を締める責任が政治家にもメディアにもあるのに、そんな発言や報道がさつぱり見当たりません。禍根を残さぬよう、今が大事なところです。

▼第三の矢の成長戦略ではバイオ、医療介護などが言われていますが、お役所がへたに「成長分野を名指す」などしないに越したことはない。それが成長戦略だなどと考えるのは過去の失敗になんら学んでいないこと

を示すもので、政治は国民が将来に期待を持つように大きな磐石のビジョンを示さなければいいのです。

かつてこの国を支えた健全な中間層を復活する、初等中等高等教育を立て直して可能性豊かな若者を育てる、「徳のある豊かで美しい国家」を中央のみならず地方からもつくり上げる。こうしたビジョンが国民を鼓舞したときには、「失われた30年」などという危惧は雲散霧消して日本人は悲観主義を捨ててでしょう。

▼「楽観主義は現実を直視しない」という批判もありますが、悲観主義とどちらが好ましいか。私は楽観主義派です。悲観主義が横行し「どうせ何をやってもいいことない」などと若者がすっかりやる気をなくしている社会、内向き志向なのに偏狭なナショナリズムだけは盛り上がる社会はもうたくさんです。それよりも「だめでもとこと」「ひとつ挑戦してみるか」という楽観主義の社会へ、もしアベノミクスがつなげていくことができたなら、私も○から◎にしましょう。